

日本の文学

72

中村真一郎
福永武彦
遠藤周作

中央公論社

中村真一郎
福永武彦
遠藤周作

昭和44年7月25日初版印刷
昭和44年8月5日初版発行

発行者 山越 豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 東京プロセス株式会社
色刷口絵印刷 株式会社大熊整美堂
口絵写真印刷 東京プロセス株式会社
本文用紙 本州製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
函ボール 佐賀板紙株式会社
製本 小泉製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

中村真一郎

女たち

遠隔感応

福永武彦

草の花

飛ぶ男

遠藤周作

海と毒薬

335

316

163

129

5

影法師

母なるもの

小さな町にて

注解

解説

年譜

篠田一士

口絵

挿画

「女たち」

「女たち」「遠隔感応」

「草の花」

「海と毒薬」「母なるもの」

香月泰男

香月泰男

加山又造

福沢一郎

523

510

502

480

455

432

中村真一郎

女たち

私が今日、あなたに結婚を申し込んだのは、突然なことで、あなたを驚かせたようだ。日ごろ、冷静なあなたが、目もとに涙をにじませたのを見て、私の申し出の唐突さに、私ははじめて気がついた。しかし、私は街のレストランで、食事中に、いきなりあのようなことを言いだしたとしても、もちろん、それは決して単なるその場の思いつきや気紛れではない。

私はすでに最近、四十歳を越した。これから、何度も人生をやり直すことのできる年齢ではない。従って、私にとつては、二十代の青年にとつてよりは、結婚の申し込みというようなことは、取り消しのきかない、重要なことである。また、夢のような憧れや、一時の熱情に任せて、発作的に口走るといふわけにもいかないことである。申し出の機会の掴み方が、いささか場違いであったとしても、それは長い熟慮の末のことであつた。

まだ人生をはじめたばかりのあなたは、結婚をそのよ

うな計算の結果として考へるやり方には慣れていないかも知れない。いや、結婚と恋愛とはひとつのものであり、それは魂をとるかすような甘美な体験であると信じていて、だから私の何げない申し込みの態度に、意外さを感じたかとも、惧れている。私は先ほども言ったように、たしかにあなたを愛している。あなたがはじめて、私の仕事の助手として、私の前にあらわれた時、すぐ私はあなたを愛しはじめたのかも判らない。それに気がついたのは、半年ほどたつてからであるが。しかし、私はそれが最初の愛の経験というわけではなかったから、そうした気持が必ずしも永続きすべきものではないことを知っていた。愛を自覚したからといって、ただちにそれを相手に伝えるという年齢は、私はすぎている。いや、それが年齢の問題ではないというのなら、私の性格にはそのような軽がるしい行動を嫌う慎重なところがあると言ひ直してもいい。現に、今までも、ある女性は私のそのような慎重な深さを、卑怯だと罵つて去つていった。また、ある友人はそうした私の態度を、責任を取るのを怖れているのだと批判したし、別の友人は気のきかない、さばけない男だと突つた。

とにかく私はあなたに対する愛に眼覚めると、その感情をじつと見張りながら、あなたのまえでは、そぶりに出さないでいるように気をつけていた。もっとも、そ

これは大した努力を必要としなかった。私とあなたとの接触は、純粹に仕事のうえのことであり、それに私の気持ちも、そういう仕事の途中で、激しく燃えたつということではなかったのだから。むしろ、私はあなたと机をはさんで向きあっている時には、楽しい落ちついた気分であいられた。私のあなたに対する愛が、またその愛をあなたに伝えないでいることが、私を苦しめるのは、あなたがそばにいない時、大概は、ひとりの部屋で寢床に入ってから、眠るまでの時間だった。

しかし、もし、あなたが、現に今そうであるような、理性的な性格でもなく、また、私とあなたとの関係が仕事を通してでもなく、さらにあなたが学校を出たばかりの娘でなかったなら、——たとえ酒の席で接するような女性で、そうしてその女性がすでに何人かの男性を知っているというような場合だったら、私ももっと気軽に、自分の気持ちを通じさせていたかも知れない。が、現実はそのうではなかったし、私は愛を告白しないでいられなくなった時、それを告白するのなら、次の用意として、結婚の決意をしておく必要が、あなたに対してはあると考へた。そうして、実際の行動としては、順序が逆になり、まず、結婚の申し込みを先にすることになった。

私はあなたの方の私に対する気持ちについても、長い間、観察したり想像したりしてきた。しかし、それは、面と

向って、はつきり訊いてみなければ、結局は判らないという結論に達した。また、申し込みをした時に、あなたがどのような反応を起すかは判らないから、いろいろの場面を考え、最悪の場合は、あなたは怒りと嫌悪のために、私のもとを去ってしまうかも知れないとも危惧したが、そうしたことも実行してみないことには判るものでもなく、私の現在の気持ちとしては、たとえあなたを失うにせよ、それを試みないではもういられないところまで、押しつめられてきていると思つた。

そうして、今日の申し出となつた。

それに対するあなたの反応は、惧れていたほど悪いものではなかった。しかし、また四十歳の私の心のどこかに残っている、夢みがちの少年の妄想したほど、ロマンチックなものでもなかった。やはりあなたは、強い衝撃を受けたようではあつたが、その衝撃を立派に受けとめた。そして、その申し出について、「考へるための材料」を与えてほしいと言つた。

これはもっともな言い分であり、そういう申し出をあなたから、まともに受けるだろうと予想しなかつた私の方が、迂闊こつこつだった。

そこで、私は家に帰ると、早速、この文章を書きだした。私はあなたに、私を判断する材料を喜んで提供しよう。そしてその材料というのは、結局のところ、私の過

去の行状とその行状に対する私自身の考えであり、また特に、女性たちと私との関係についての告白になるだろう。四十年間の私の生活は、私なりに曲折のあったものだし、現在の私を受け入れるとしても、表面だけの私を見ていては、私の内部に堆積している、私の過去の影は、必ずしも察知できるというふうにはいかないだろうから。

ところでこの文章を書く私の態度を、最初に明瞭にさせておくことが、やはり私の義務かも知れない。それは正直に、端的に書くという態度である。私は自分の過去の経験を卒直に語ることに興味がある。いや、この文章を書くことによって、改めて私の過去を反省することに興味を持つていると言ひ直した方が正確だろう。私は従来、このような機会を持つことなく、今日に至つたのだ。もつとも、大部分の現代人にとつては、一生に一度も、このような自己の決算をするという機会は訪れないかも知判らない。現代の生活は歴史上、例がないほど忙しいものであり、私といえども、もしあなたに要求されるといふようなことがなかつたなら、そのような試みをする気は起らなかつたろう。

あなたは聡明であるから、私が自分の利益のために事実を美化するだろうというような、私を侮辱する愚劣な想像はしないでらうと思う。また、逆に私が自己嫌悪から、事実を故意に犬儒的に眺めたりするような、青年ら

しい焦燥感を持って、書き進めて行くようなこともしないことは、断わる必要もないだろう。

私はまず事実を提供する。それは、事柄自体というより、その事柄の私に対して与えた反応——つまり主体的な真実というふうなものである。私はできるかぎり、その事件が当時の私にとって持っていた意味を、そのままに再現してみたい。そして、その後でその事柄に対する私の現在の感想をつけ加えることで、その事実が現在の私を形成するうえで演じた役割を考へることにした。そうした体験の、幾つかを重ねあわせることで、現在の私の人格の全身像を描き出してみたい。これはあなたの私に要求した以上のことであるだろう。あなたは若い女らしく、私の生い立ちとか、また、成人の後では、主として私の女性関係に関心を持つているのだから。しかし、私はそうした過去の女性問題を書きはじめようと思ひついた時、結局、その試みはただの事実の報告にとどまることはできず、それが現在の私に影響を与えている度合についても考えざるを得ず、また、そうすることが、私が私の実際をあなたに知ってほしいと思つていたことと、おのずから通じて行くことにも気がついた。

これがこの文章を書くに際して、最初に思ひ定めた私の態度である。そうして、その態度に従つて、後は思ひつくままに書き継いで行くばかりである。従つてこれは

いわゆる首尾一貫した、調和ある小説のようには仕上がらないかも知れない。私はむしろ下手な小説家のように、筆のおもむくままに、勝手なところに感想を挿んだり、また、後で思いついて前へ引き返したり、そのような無器用なことを繰り返すだろう。が、そうした混乱もまた、私の私自身への接近の迂路を正直に示すことになって、かえって整理された文章よりは、私の気持がうまく表現できるかも知れないという、自惚れも、また、ないわけではない。

私は母を知らない。私は大正年間の東京の静かな山の手に生まれた。私の乳児期は平和だったらしい。しかし、私の記憶の最も古い奥まで探って行っても、そこには母の姿はない。二、三年ごとに変る女中と、私はいつも淋しく遊んでいた。男やもめとなった父は再婚することなく、夜も遅く帰ることが多く、しばしば外泊した。といつて、父は私を愛していなかったわけではない。日曜など父は、ひとりきりの子供である私を連れて、公園や墓地などに出かけ、帰りは料理屋に連れて行って、御馳走を食べさせてくれたりした。時には待合とか寄席などへ私を引っぱって行くこともあった。また、家に来客があると、必ず私は呼び出されて、父が客を相手にして、私について喋る自慢話を聞かされた。私は親はかというの

は、父のような人だろうと子供心にも思ったものだ。父は今になって考えると、日本人には珍しい個人主義者だった。あるいは個人主義者という役割を演じること、子供のような喜びを感じていた人かも知れない。たとえば父は、中学生になったばかりの私の部屋に入ってくるのにも、必ずノックをしたし、私に月はじめに、その月の予定を話させ、その予定による予算案を提出させて、それで小遣いを渡すというようなことをした。精神的にも経済的にも、できるだけ早いうちから、独立した生活をすべきだというのが父の意見だった。

父は私が大学に入ったら、自分で働いて学校へ行くべきだ、と言っていた。また、私が百科事典を買ってほしいと申し出た時には、小学生の家庭教師をして、その費用を自分で稼ぐようにと言った。また大学を出たら、自分で職業を探し、父の家から出るようにと言っていた。その代り、父は決して老後も私の世話にはならず、気軽な養老院にでも行くつもりだとも語っていた。中学に通えるだけでも、現代の日本では特権的なことから、それ以上の贅沢をするには、親の金をあてにするのは不当であるし、また大学や就職やで親の世話を受けるのは、私自身の独立心にとって、恥じるべきことだから、私を愛し、私の人格を尊重するゆえに、過大な援助は差しひかえるというのが、父の論理だった。

そうした父を私は尊敬した。父は私にとって、唯一の肉親であるだけでなく、誇りだった。

父は私が中学の二年生になった時、突然に外国へ行くと言いだした。私は父の持物である信州の牧場にあずけられることになった。私は日ごろから教えられている独立のために、その機会を喜んで受け入れた。また、父が自分の意志でヨーロッパへ行くのを、甘えて反対したりするのは、父の独立を子供の私が邪魔すること、それは恥じるべきだとも信じた。しかし、父を横浜に送った後で、主な見送人たちが、一緒に支那街で会食した時にある父の古い友人と、父の懇意な待合の内儀とが、父の渡航の真の理由について、小声で話し合っているのを、私は偶然に耳にした。それによると、父は私の母の死後、随分、激しい放蕩生活を送ったけれども、ついに母を忘れることができず、その傷心の強さから、私をも捨てるようにして、日本を去って行ったのだということだった。あんな親父を持った息子が可哀そうだとか、また父が最近、援助していたある芸妓が、父のそうした仕打ちを嘆いているとかいふふうの言葉も聞かれた。だが、私はもし父が母を想いつづけて、その想いの重さに耐えられないで、日本を逃げだしたのだとすれば、なおさら、父がいとしい人であるような気がしたし、またそうした父に精神的負担を掛けないように努力しようと決心した。

私は信州の、ある小都會の中学校の寄宿舎に入り、休暇になると牧場へ引き返した。牧場を父から預かって管理していた夫婦は、私を主人のように好遇した。夫婦にとって、私の父は一生忘れることのできない恩人だといふのだった。そして、私はその管理者から、毎月、遣いきれないほどの金を送ってもらったし、またそれ以上の金が、私の分として、いつでも引き出せるように銀行へ入れてあるという話だった。

私が高等学校の入学試験の勉強をしている最中に、父がフランスの田舎で死んだという知らせが入った。父はあるフランス婦人と同棲していたらしかった。その婦人は機会があれば日本に来て、私にも逢いたいし、場合によっては、私をフランスに連れて帰ってもいい、という意向のようだった。

私は父の死によって、境遇が変わるのではないかと惧れた。しかし、もし上級学校へ行かれなくなったら、それでもいい。この牧場で働くのも面白いだろうと、思い直した。ところが管理人夫婦は、私がこの牧場の主人となつたのだから、経済的には今まで以上に自由なのだと言った。

私は上京して、高等学校に入った。毎月の仕送りは相変わらず続いてあった。私はもし父が生きて日本にいたら、自分で働きながら、勉強しなければならなかったのだと

考えると、運命の不思議な皮肉を感じた。父と同棲していたフランス婦人は、国際政局の不安から、渡日を当分延期するということだった。

信州の中学の寄宿舎生活は、まださまざまの制約があった。しかし、東京の高等学校の寮の生活は、ようやく私に精神的独立というものを感覚的に理解させるようになった。また、私はこうした自由に耐えられるだけの年齢に達しはじめてもいたのだった。

私は高等学校でひとりの親友を得た。佐竹という相当有名な外交官の息子で、当人も将来は父の職業を継ぐと決めていた。私はどうしてこの男が好きになったのだろう。今、考えてみると、その友情には奇妙に表現の困難なものがある。

大体、高等学校の生徒の——私の言っているのは、戦前のいわゆる旧制の高校の話なのだが、——友情というのは、人生観や思想上の一致とか、相手の才能に対する尊敬とか、基礎になるものが多い。相互の弱点によって結びつく、「豚の友」*ami-cochon* というような関係は、若い純粹な青年たちの間には発生しがたい。しかし、私は佐竹と思想的に共感したのではない。私は父に教えられた精神的独立という立場から、当時、退潮しつつあったマルクス主義を秘かに研究している、少数の者たち

にも敬意を払っていたし、またようやく思想界の問題になろうとしていた日本固有の文化伝統に注目し、古代文学の実証的ななじみな勉強をはじめているような者をも尊敬した。が、佐竹にはそうした何か、ひとつのものへの傾倒というようなことは見られなかった。彼は今や日華事変を起している日本帝国の外交官となることに疑いは持っていなかった。ただ軍部が指導権を握っている最近の外交のやり方について、霞ヶ関の専門家たちのような軽侮を、時どき洩らすだけだった。

また彼の才能といえ、これは幼時をヨーロッパ各地で過ごしたことから来る、当然の結果かも知れないが、外国語を幾つも自分のものとしていた。地方の中学で学んだだけの英語しか知らない私は、最初に彼が教師から指名されて、テキストを読んだ時の、全然、西洋人のような発音に圧倒された。しかし、やがて友人となると、彼の家庭の環境を聞かされ、やはり彼は例外的に外国語に上達しているのだと判って、安心した。——と、彼のその外国語は、自然にうまくなっている、天才というようなものではなく、従って私は別にその才能に敬服したというのでもなかった。

それでは私は、一体、彼のどういうところに惹かれたのか。それは彼がある何かに青春を賭けているというの

でない、平然とした冷静な生き方に感心させられたのだ、というより仕方ないだろう。高校生はほとんど皆、何かに熱中し逆上し、世の中にはカントか、ペーターベンカ、野球か、しかないという風に生きている。そして、自分と同じ目標を抱いていない人間は軽蔑する。しかし、佐竹はそうした熱い空気のなかで、テニスのチャンピオンにもなり、歌舞伎研究会の委員もやり、中国語の講習の世話役も兼ね、また、西洋古典音楽の定期レコード・コンサートの司会者でもあった。

彼はディレクタントだった。そして、ディレクタントであること自体にも、熱心ではなかった。庭球の対校試合に負けた時も、明るい微笑は消えなかったし、あるあわて者が、彼の秘蔵する音盤を落して破った時も、落ちついてレコードの扱い方を注意しただけだった。

そういう二十歳の年齢には適わしくないような冷静さ、またその冷静さを皮肉なものにみせないだけの典雅とも評したくなるような言動、さらには深くつき合おうとすると、決してこちらを鄭重に押し戻すような、薄情な社交人にはみられない、心の本当の優しさ、またそうした交際のあいだに時どき見せる、驚くべき聡明さ、そういうものが私を知らず知らずのうちに、彼の方へ惹きつけたということであつたらしい。

彼の方では、ところが私の氣負つた生き方、精神的独

立のために利己主義になることを許さないやり方が、好感を呼び起したらしい。彼自身は、やがて彼の家庭に接するようになるかと判つたのだが、実にいい家庭の、いい息子で、家からの脱出による独立などということは、考えてみたこともないようだった。将来の職業さえも、家の職業、外交官を継ぐという従順さだった。だから、彼自身は私の生き方を模倣しようとはしなかったが、興味は抱いたのだらう。そして、多くの同級生たちが、若さの特権を乱用して、お互いの生活を無拘束に混ぜ合わせて暮しているようなやり方を、不潔ならしなさだとして感覚的に反感を感じた佐竹は、私の超然とした独往的な生活法に、快さを覚えたのも、当然かも知れない。

私の方では、誰彼となく、ある一方に才能を示している者には、友人として話しかけ、交際を求めたのだが、佐竹は相手が無遠慮に狎れようとすると、静かに身を退いた。そして、私に対しては、むしろ佐竹の方から接近してきた。その接近の仕方は、妙にこちらに拒絶する力を抜けさせてしまうような、和やかな魅力があつた。

私たちはそうして親友となつた。

佐竹の家は、高等学校の寮から歩いて五分とはかからない屋敷町にあつた。それは明治以来、大学の教授や高級官僚たちの住んでいる静かな住宅地域だった。彼は週末には必ず家に帰つた。帰るべき家を持たない私は、土

曜の午後になると、地方出身の友人たちと遊びに出かけた。しかし、時にはひとりきりで、ひっそりとした寮室の窓際に、日向ぼっこをしながら、繰りかえして新聞を読んでいるというような、所在ない時間を持つ土曜もあつた。

そうしたある時、家に帰りかけた佐竹は、よかつたら、これから一緒にやっこないかと誘つてくれた。私はちよつと億劫だつた。というのは、精神的な面では、いくらでも大胆になりうる——つまり思想的には、いくらでも極端なことを考えられる——私だつたが、知らない家庭を訪問し、そうした家庭の日常的な秩序に従つて、話したり行動したりするということは、予想するだけで面倒だつたから。あるいはただ面倒だといふのでなく、臆病だつたのかも知れない。おそらく空想のなかで、奔放だつただけ、かえつて外界の現実に触れることが恐ろしかったのだらう。そのうえ、私は子供の時の、父とのふたりきりの生活も、日本の普通の家庭というものとは違つてゐるということを自覚してゐたし、その後の牧場生活も、中学校の寄宿舎生活も、私をいよいよそうした平常の現実からは遠ざけてゐた。私は友人たちの誰よりも、物の考え方が自由だと自信を抱く一方（その自信が現在まで一貫していることは、あなたも気がついてゐることだらうが）、友人たちの誰もが自然にその雰囲氣を身

につけて出てきている、家庭というものに、憧れではないが、一種の不気味さのようなものを感じつづけていた。友人が何気ない調子で、今夜は、親父が上京してくるから、帝国ホテルで夕食を一緒にしなければならぬんだ、などと言うのを聞くと、私はいつも理由のない嫌悪とも恨みともつかない感情が、胸のなかを走つた。

そういうわけだつたから、私は佐竹に家へ行こうと誘われた時、一瞬、ひるんだ。しかし、そうした心の動きを見抜いたのかどうか、佐竹はいつに似ず強く言いはつた。もちろん、彼はいつものようにおだやかに微笑を含んでだつたが、毎日、寮の食事にばかりいると、気持がかたくなになるし、それに寮の食事ばかりでは、健康も保てないだらうというようなことを述べた。私は彼のその言葉に、軽い侮辱を感じた。（私は他人の気のつかないうちに、時どき、そういう傷つきかたをする人間だといふことも、あなたに知つておいてもらいたい。）お前は偉そうなことばかり言つてゐても、日常生活の味を知らないから、その考え方は奇矯になつてゐるのだ、と指摘されたような気がしたからだつた。

私は反撥した。そしてその反撥心は、よし、それなら乗りこんで行つてやるぞ、という敵愾心となつた。私は立ちあがると、よおし、と大声で言つた。「まるで、試合に出る剣士みたいだな。」と佐竹はおだやかに私を冷

やかした。

玄関に私たちを出迎えた彼の母親は、棒立ちになったまま、凝視している私に、佐竹そっくりの優しい微笑を見せてくれた。「お母さん、砵に御馳走してやってください。こいつは寮のまずい飯ばかりで、餓状態におちいつてるんだから。」佐竹は靴を脱ぎながらそう言った。私は、中学校の寄宿舎の飯にくらべて、寮の食事を非常にうまいものだとばかり思っていたから、佐竹の言葉が私の味覚の粗野なことを諷刺しているように聞こえて、厭な気がした。

私は佐竹の書齋に通された。古風でどっしりとした書棚が、私を圧迫した。しつけのよさそうな若い女中が——小間づかいと言うのかも知れないが——茶を持って入ってきた。そして、私に挨拶した後で、佐竹に、「お帰りなさいませ。」というような言葉を言った。それを軽くうけ流している佐竹は、寮で見る高校生という感じとは違った、若主人、というような言葉の似合う態度だった。無遠慮な田舎者の多い寮のなかでは、気取っているとも見える佐竹の礼節ある言動が、なるほどこの家庭ならば自然なのだ、と私は覚った。

そこへ扉が開いて——その扉がまた、厚い木で作ってあることが、入りばなに私を威圧したものだだったが——可愛い少女が入ってきた。

彼女は丁寧な私に頭をさげた後で、「お兄さま、明日の晩、音楽会へ連れて行って……」と言った。その「お兄さま」という呼び方が、いかにも快かった。甘くて優しく、信頼に満ちている、その呼び方は、その後、何度も耳にすることになったのだが、いつまでたっても、私は最初に聞くように感動させられたものだ。そして今でも、——もう二十年も経った今でも、彼女、佐竹しず子のことを想いだすと、その甘い、不思議に淡い「お兄さま」という呼びかけが、耳もとに甦ってくる。そして、あの高等学校の建物から歩いて五分とかからない、古風な洋館のなかには、静かで平和な家庭というものがあつたのだ、と思いかえすのだ。その後の生活の変転のあとで、家庭というものも、さまざまな厄介ごとに満ちているのだと知っている私ではあるが、あそこには確かにあの時、家庭があり、家庭というものはいいものだった、と私は郷愁のように、思いだすのである。

佐竹は毎週のように、私を家に誘った。君は母にも妹にも評判がいいよ、君が行かないと淋しがるから……というのが、佐竹の言い分だった。私には、彼の良い家庭が、苛立ちやすい私の精神に、安らぎを与える効果があるというのを彼が見抜いていて、しかもそれを直接に私に言い出すことが私を傷つけるのだと恐れ、彼の家庭が私を歓迎するのだという理由を持ちだしている、とい

うことが判った。(それは今になってみれば、私のひがみだったかも知れない。しかし、自分の自由精神に絶大な誇りと自信とを持っていた、当時の私は決してそれをひがみだとは承認しなかったし、また、意識の片隅にでも、そうした疑いが浮んだかどうか、怪しい。私は他人の気づかぬうちに傷つくような弱々しさがあったと先ほど、指摘しておいたが、一方で逆に、世慣れないところから来る、——あるいは日常的家庭的交際の欠如から来る、妙な鈍感さもあったようだ。その鈍感さは、だから、今度は私の知らないうちに、他人を傷つけるようなことを惹きおこしていたかも知れない。)

佐竹が私を傷つけないように、しかし、傷つけないようにという配慮をしていることも匿して、私を誘うのに対して、私は逆にそうした配慮に腹を立てて、しかし、腹を立てたことを見破られないために、今度は私が相手のそうした気の使い方、一切、気がつかないふりをした。(私はしかし、そういう心の働かせ方を、今から反省して、実に厭だと思ふ。私が青春時代の私に対して、悪い感情を抱いている理由の主なものに、こうした過度の敏感さの思い出を挙げることができる。それに比べると、今は亡い佐竹の方が、何と自然に素直に、私に向って友情を發揮してくれただろう。そして、そのようなおだやかで優しい佐竹の性格を生んだ、彼の家庭

というものが、私を次第に惹きつけることになったのも当然だと思ふ。)

私は自分の気持の動搖に反対するために、しかし、自分では佐竹の心遣いに反抗するつもりで、いつも佐竹の誘いに応じた。だから、稀に佐竹が私を誘わない時には、深い淋しさと、また、非常に身勝手な話だが、怒りさえ感じた。しかし、それも佐竹の方では、親戚を訪問しなければならぬとか、家に面倒な来客があるというような、当然の理由があったので、故意に私を避けているわけではなかった。それに佐竹は、気まぐれではないという美点があった。だから、私と友情が深まるにつれ、その友情を忠実に守り、新しい友人を作ったりすることはなく、従って、私以外の人間が、私の代りに家庭へ招待されるといふようなことは起らなかった。

むしろ、私の方が時々、新しい熱中の対象を発見して、しばらくの間は、佐竹とは週末だけの友情を保つというようなことが、時々、あった。

何度も佐竹家を訪問し、土曜日曜と彼の家に二泊することが習慣となると、私は必然的に佐竹家の人々と親しくなった。温顔で物静かに話しながら、決して相手に狎れるすきを与えない父親に対しては、私は最後までなじむことはできなかったが、その父親とは夕食の時だけ、それも月に一度くらいしか、会わなかったし、それに佐